

復習シート 第二学年 国語



組	番号	名前

【登場人物の心情を読み取る問題】

1 次の問題を解きなさい。

「ここまでのあらずじ」 岡村七郎は、とても仲の良かった友人の沢田を、事故で亡くし、大きなショックを受けている。そして七郎が去年、沢田と参加し活躍したT中学との対抗マラソン大会を迎えた。しかし、気持ちが入らない状況であった。

その秋のマラソンは「名月マラソン」という名目で、十五夜の晩決行されることになっていた。O町の海岸からT町まで、海岸線五哩の往復というのである。

空は蒼々と澄み渡っていた。お伽噺のそのの如く、大きな月は未だ暮れきれぬ中から空に白銀のように光っていた。

町民は熱狂した。花火はひっきりなしにあげられた。砂浜は見物の人、応援の人々で麻のように乱れた。海岸の所々には目標の為の篝火が燃え始めた。——その夜米村と共に選手の重任を帯びた七郎が、何れ程衆目を集め、又味方の人々から期待されたかは、ここにしるすまでもあるまい。

やがて割れるような歓呼に送られて、選手達は徐ろにスタートを切った！

余り長くもない町を出てしまうと、ただ遠くに祭のようなぞめきが、聞える許り。それもだんだんに消えてゆくと、もう月と海とそうして海辺の松とより他に見ているものはなかった。水面に投げられた月光の反射が松林の奥まで光っていた。さざ波はパサパサと駆ける七郎の足音に韻律を合せていた。

① 何という美しい月だろう！

七郎は駆りながら思わず呟いた。——自分の心とは全然離れて、ただ足だけが機械のように動いているのであった。あとにも先にも人影は見えなかったから、自分が勝っているだか、敗けているのだから解らなかった。——今が今、あれ程多勢にさわがれて送り出された自分であるとは、どうしても考えられなかった。それ程月は美しく静かに照っていた。……今にも沢田の声が聞えるかのように、波は小さく囁いていた。今夜のような良夜な

ら、月の世界にもゆけそうに思えた。月とお話も出来そうに思われた。死ぬことと生きることは、別にそう大した区別のあるものとは思われなかった。そうなると七郎は今迄沢田の死を悲しく思っていた事が、何だか無意味のように思われ出した。

「そう、沢田は今頃どんなに幸福に暮しているかわからない……」

もう悲しむまい。そうして沢田がいる時と同じように、愉快に楽しく送れないわけはない。何故なら沢田はすぐその月の窓から、自分に話しかけているのだもの……。

「沢田君、今日から又二人で旧のように面白く遊ぼうね。」

誰にいうともなくこう言った、七郎の瞳は新しい希望にもえて来た。

「岡村君、君は思い違いをしているよ。君は僕が死んだと思って悲しんでいるが、僕は決して死にはしないよ。そら、去年と同じように君と一緒に駆けているじゃないか。」というかのように見えた。

七郎は思はず微笑んだ。

「沢田君、一緒に駆けよう。」と云って、七郎は今度こそ本気になって走り出した。

《牧野信一「月下のマラソン」より。学習上の配慮により旧仮名遣いを直している。》

(注) ※五哩||約八km。一マイルは約一・六km。

※篝火||夜間、照明などのために燃やす火のこと。

※衆目||多くの人が見ること。

※歡呼||喜んで大声をあげること。

※ぞめき||浮かれてさわぐ様子のこと。

※良夜||月の明るい夜のこと。特に、中秋の名月の夜のこと。

問1 ——線部①「何という美しい月だろう！」とありますが、七郎が感動した月の様子を、たとえを使って詳しく説明している一文を探し、最初の五字を書き抜きなさい。

レベル7/9

問2 ——線部②「七郎は今度こそ本気になって走り出した」とありますが、その理由の説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

レベル8

- 1 七郎は友人の沢田が死んだと思っていたが、実際に目の前に現れた姿を見て近くにいいことを実感でき、力が湧いたから。
- 2 七郎は去年死んだ沢田のことを月から思い出し、走っている時のさざ波が沢田の応援に聞こえて新しい希望がもてたから。
- 3 死んだ友人の沢田の声が美しい月の光とともに自分に降り注ぎ、月の世界でやっと再会でき、励まされたから。
- 4 七郎は死んだ沢田を美しい月によって近くにしていると感じ、その沢田と一緒に走ろうと言ってくれているように思えたから。